



源氏物語繪本

全

源氏物語繪本





此源氏物語の事。往昔貴賤をわく人の好むる支地書
 小紙より。さきさき此道の先達心切。さへくちを註解をく
 けり。書籍牛に汗し種を充はふ不悞。其志しけり。も
 し。其本支を。讀得る事。あは。亦讀のうら。解
 す。事。又。か。ま。故人の註釋せる。河海明皇。孟澤。岷江。
 辨了。萬水。湖。月。の。た。い。卷。教。を。き。大。部。の。品。を。更。よ。り。つ。は。
 十帖を。さ。源氏。の。轉。を。色。抄。忍。草。等。ゆ。て。同。合。さ。さ。
 ま。あ。わ。く。を。き。ち。う。者。わ。く。し。く。一。階。子。も。た。る。う。ら。は。
 五十。四。帖。の。繪。を。写。し。画。下。一。首。の。う。た。を。あ。げ。て。思。産。の。眼。り
 あり。解。物。の。ゆ。な。り。な。り。あ。り。あ。り。あ。り。

天保丁酉冬再版

李園主人志

は源氏物語の事。往昔貴賤をわく人の好むる支地書
 小紙より。さきさき此道の先達心切。さへくちを註解をく
 けり。書籍牛に汗し種を充はふ不悞。其志しけり。も
 し。其本支を。讀得る事。あは。亦讀のうら。解
 す。事。又。か。ま。故人の註釋せる。河海明皇。孟澤。岷江。
 辨了。萬水。湖。月。の。た。い。卷。教。を。き。大。部。の。品。を。更。よ。り。つ。は。
 十帖を。さ。源氏。の。轉。を。色。抄。忍。草。等。ゆ。て。同。合。さ。さ。
 ま。あ。わ。く。を。き。ち。う。者。わ。く。し。く。一。階。子。も。た。る。う。ら。は。
 五十。四。帖。の。繪。を。写。し。画。下。一。首。の。う。た。を。あ。げ。て。思。産。の。眼。り
 あり。解。物。の。ゆ。な。り。な。り。あ。り。あ。り。あ。り。



まぶさてうたのてしる
 多る小菟式部の名を
 わくくあてはふ式部と
 号せらるるなり
 一説小菟式部の名も
 うたのてしるをて後小
 菟の菟のやうり小菟の
 字小改めらるるなり
 或説小菟一条の院の
 りのてしるり上東院
 へあはせらるるなり
 やうりのものにあはれ
 ちやうせしとてさき
 ひろふふのてしる名
 とまひり
 石小菟らうりて

すはあうりのあまを
 八月十五夜の月遊水
 らうりて物部のあま
 室小菟をてしる
 さきとて佛菟の
 文をひらうりて
 との儀は実のてし
 用ひらうり
 大菟若種一説を
 てしる
 名とてしる
 須磨の美小菟氏の
 させんの子をてしる
 八の酒の宮の元大臣
 言明公なり
 此説信どぐりて

まぶつひたる
 末摘花
 あけり
 りうとま
 こ
 この
 まあ
 はひ
 を
 持て
 ぬき
 けん

まぶつひたる
 紅葉賀
 のの
 まあ
 はひ
 を
 持て
 ぬき
 けん



事万水一橋小宮院
 朱峯村上は三代小准
 なるありさき天板壺
 のみうとを六延壽朱峯
 を六天慶冷泉院を六天
 曆小比一母り光徳氏
 の君を六延壽の所子西
 の宮の九大臣を明公
 小比をるあり周公且
 東征兼丞相在納言の
 ありを思ひ又光君
 友壺の女所密通の子
 在永の羽林二条の後
 小密通の儀相似する
 小准なるあり
 你氏八朱峯院冷泉院

あど書する小宮
 て宇多の天宮より
 臨すのありありあり
 のさうらぬ祝あり
 さる一条院の在時の
 さるをあらはさる
 いひありするものと
 思ふべし
 此物語作者の事
 宇治大納言物語不
 日今八むり一紙あり
 守為時とてさるえ何
 る世小宮さうり
 なる人八朱峯をさ
 なるありはる時源
 氏八作りするありと



定一七信一がこ
ら

は物鏡鏡本一やう
あつてつる子河海
抄孟洋抄考ふ云
形成の自筆の本
もこつて今世不
法さるる源の光
形八本を以て校
合取捨し家本
とせりいりや
二条師伊房本
冷泉中納言朝隆本
堀河九大臣俊房本
貫表紙とのふ
九大臣の筆跡

後一位藤子本
土御門右大臣女
系極北政司
法成寺園白本
尚侍版本とのふ
又条三位俊成本
京極中納言定家本
青表紙とのふ
おのつて鏡本といふ
とも皆異同あり
古写本をうんぐ合
せし且了見を加ふ
て其ののら合のふ
たふ不違ふ古今の
異言あり
河内本八河内の子

関屋

あふ
さうの
せきや
いりあふ
あつて
ながまら
まげま
あまの
申を
こつてん



あまの
繪合

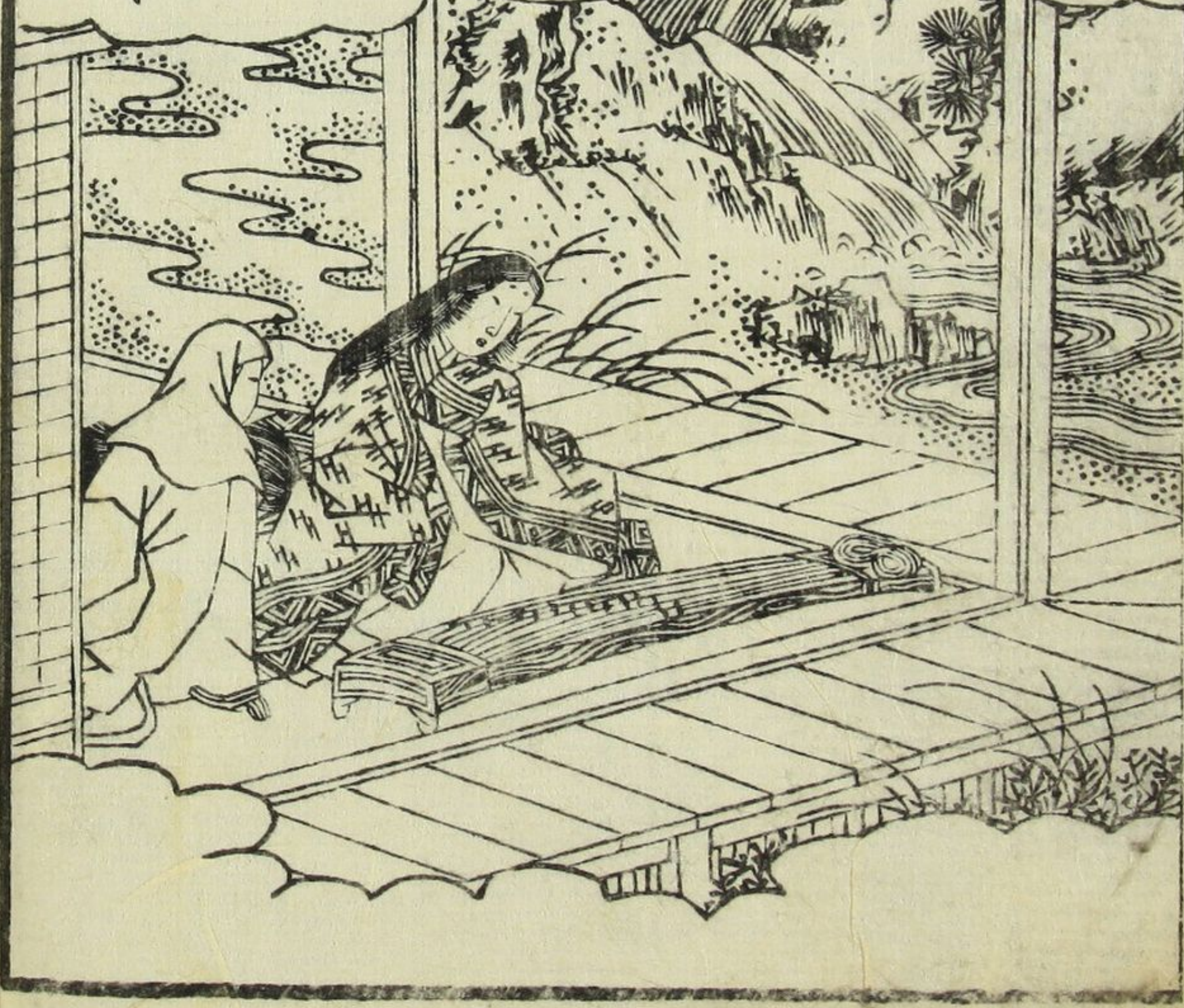
うきあ
その
をり
よま
けの
ま
あふ
あつて
あ



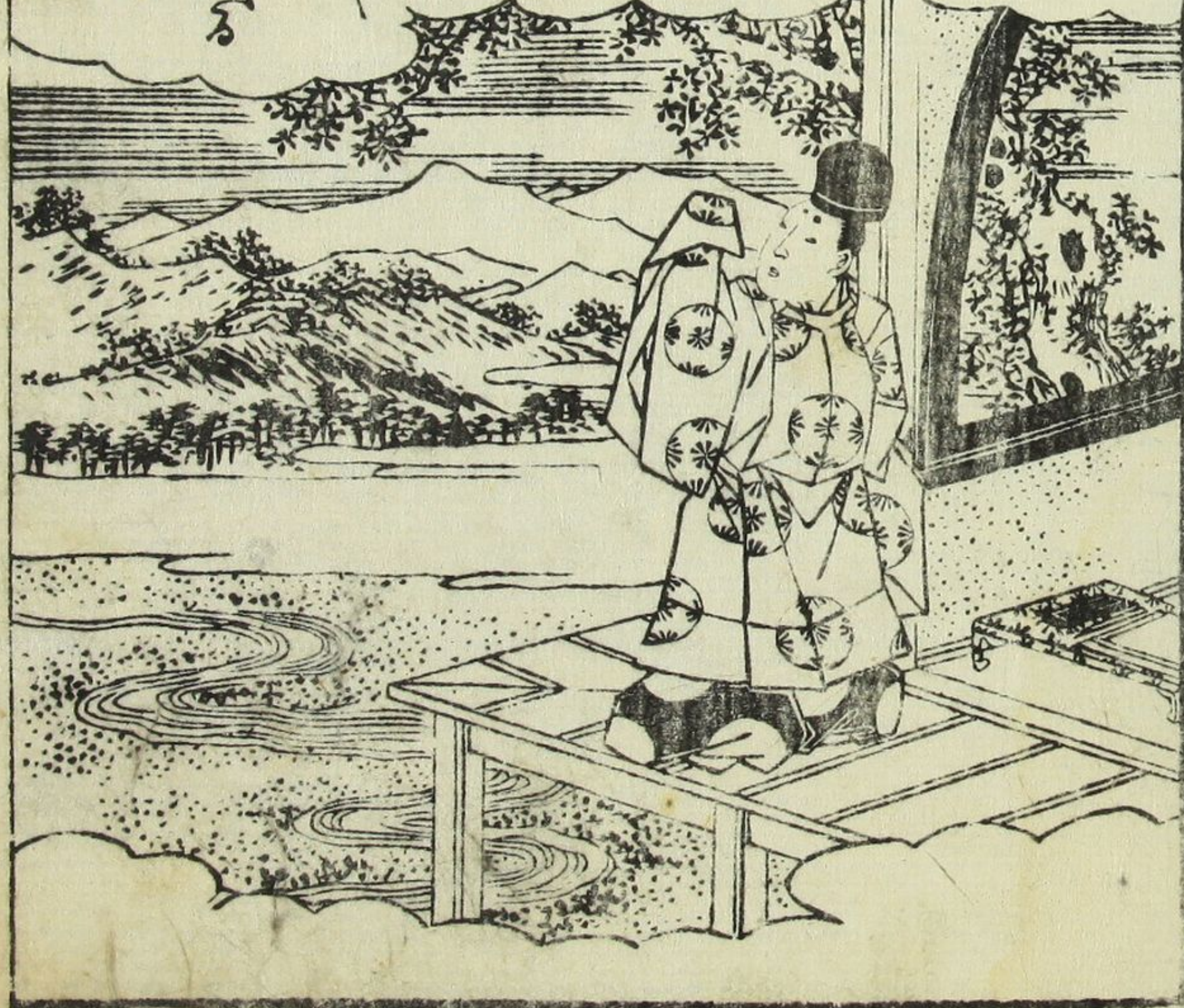
大監物係の光乃
ハの本を以て授合
取於し家の本
とせしとて河内
本とよみ
紹巴抄ふまひの
がりふ本の是矣
あり定家河内
筆の青表紙中
頃とんぜろのやう
ありしとて河内
の守光河内氏抄
巻をとりしとて
あてはふとて
河内本とせし
ありしなり

耕雲老人河内本
を伝ふを以て
きりしとて河内
本を用ひし
云々
宗祇定家河内
本をゆゑ思ふ
とて志高良とい
ひ一人ふあひ
さし青表紙傳
受しとて河内
ありしとて河内
一条禅園の河内
まのめとて二条西乃
つらとて河内
といふとも河内

松風
三
舟を
久々
むら
の
きよ
ま
は
に
は
ゆ
く



薄雲
三
ゆ
く
の
袖
は
ゆ
く



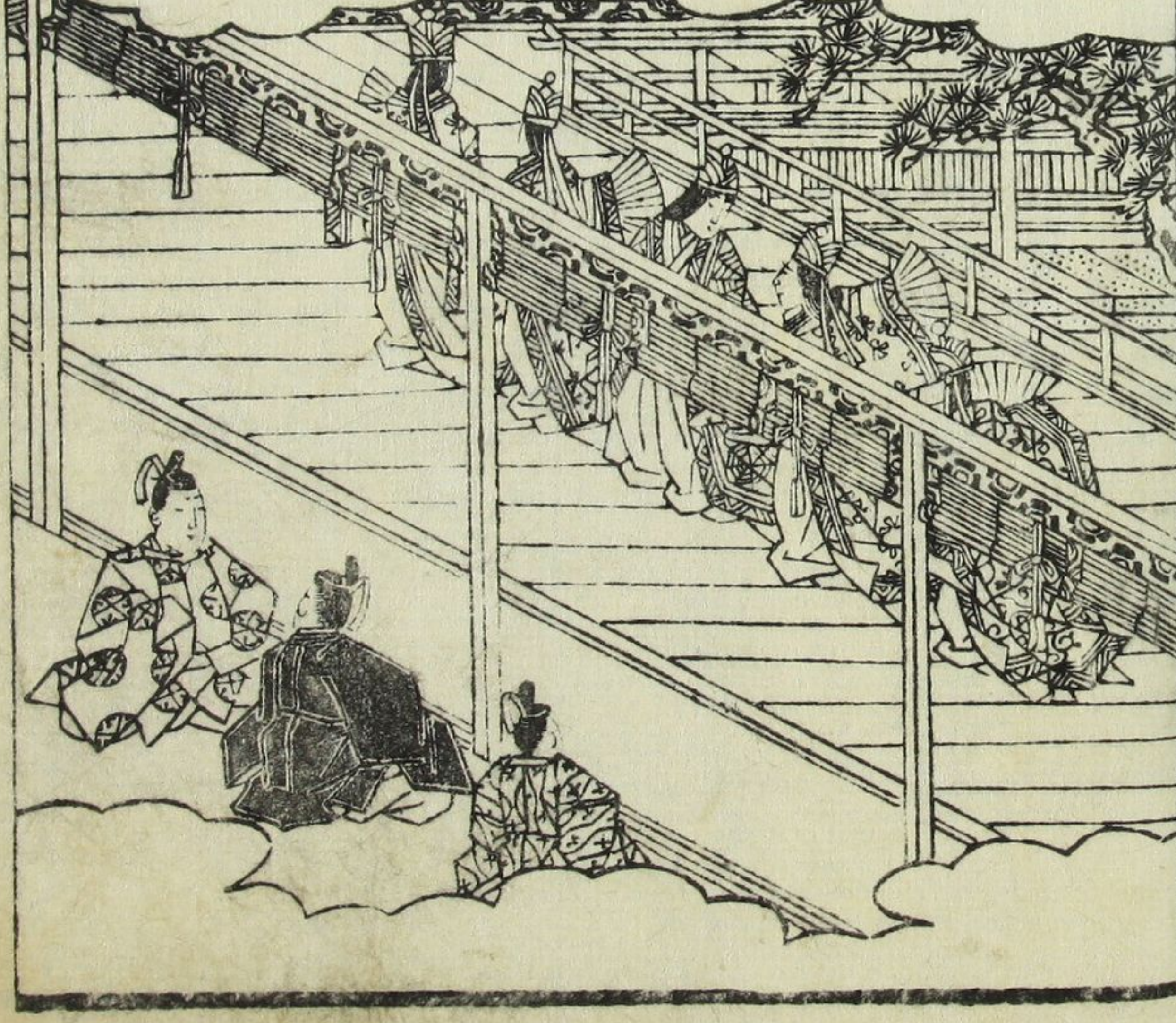
ふらきつりく道遠
院友へ云ふ中やき
ましつりくあり
云々
辨ら抄ふ云系極
中納言定家々の
本青表紙と号し
宗祇用ひく今ふ
るあま一華堂乘
阿云定家の青表
紙を因防の國の
守ゆく一覽せり
外題ハ青表紙ふ
定家々うちつけ
がきりり百四代後
土御門の院宸筆

ふてげごのをまん
中ふかーなつり
今世不源氏の外
題をまん中ふる
事ハことゝを例と
せり定家々自筆
相壺苑の宴携姫
の三冊之余ハ後成
々のむきあふどの
筆と水尾づーの
美らせつるを道遠
院うきーのり
云々
宗文要領ふに河内
本青表紙とく成
物鏡二かふこと

朝顔
をりの
はゆ
まね
あまの
ぐわの
なふの
はつり
まね
しねん



乙女
をこめ
子が
神さび
あまの
まね
まね
まね
まね

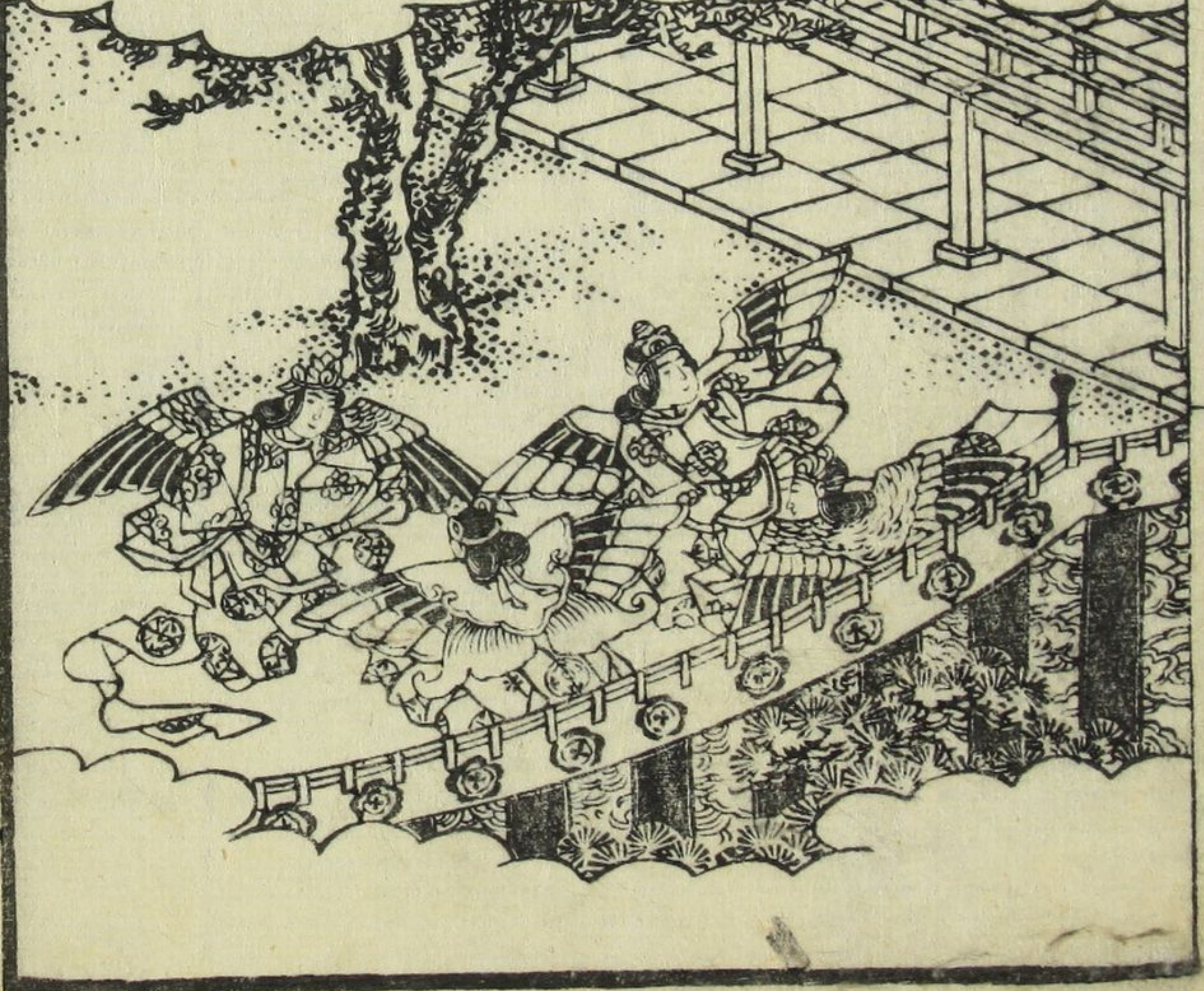


世の抄物小いけき
 りつる古おしあふる
 を引くひの今又
 およぶとこあまか
 のうちこひ河内
 ふもあま青表紙小
 もあまよきを用ひ
 あまきをのぞけき
 又るべきふとまき
 うみののこり今の
 世小傳のこまろハ
 ひつても傳写のあま
 まりうまづらひのち
 がひ脱落候はる
 してきこりぐき
 所多き小いけものが

この系極黄門を
 ちよあ母の先達
 心をつくしゆくも
 あまよきそ美観他
 書小こころあま小
 徳本とあまあまの
 さくあきしそ昔本
 多しきひひり式
 紙が回書をのこり
 そのゆきをうしあ
 ざるふあまぐり
 よろこぶ
 更科の記小云あ孫
 まるちあどやうの
 人このいれ地がす
 うのゆのぐり免跡

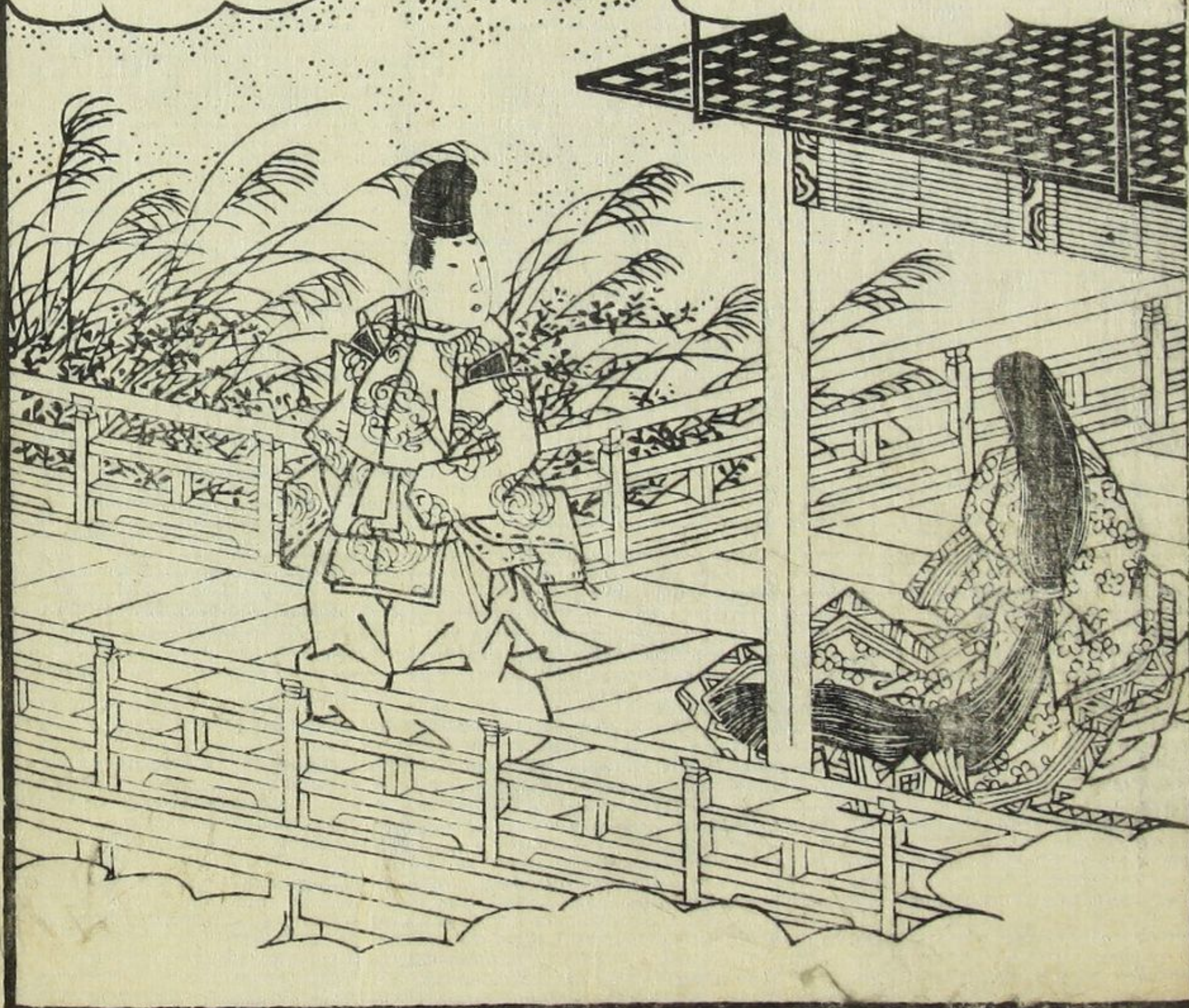
花ぞの
 胡蝶
 おてふを
 さま
 志
 味まの
 ろとく
 えん

螢
 身を
 わがま
 こそ
 りより
 まま
 おのひ
 あらん



がりふ宇治のま
 のむきあ、そのち
 あるさくらさるあま
 まばせきふくまも
 ませつるあまさん
 やうきうあまひ
 とさるざりーげふ
 そうしたあまさん
 ひつうさうさうさ
 ことりてとのあま
 西の宇治友をいう
 つかの中も浮舟の女
 のからあまあかん
 あどまが思ひのあ
 るさ
 以上あまのふあ

野分
 風さるさ
 むくも
 まうふ
 あま
 ふ
 日さる
 海さ
 日さる
 日さる
 日さる
 日さる
 日さる
 日さる



のどうりをやめ
 しろは史料の記
 たぐりあまさん
 史の物語とをま
 るのけさ
 獲衣ふふありは
 小うさひのいとせ
 せふあまさん
 うーのあまさん
 さまづあまさん
 光徳氏ののうま
 けるものさをあ
 せんまさとあま
 るふまさんとあ
 めしあまさんと
 けりま

御幸
 まうふ
 あま
 けり
 まうふ
 あま
 けり
 まうふ
 あま

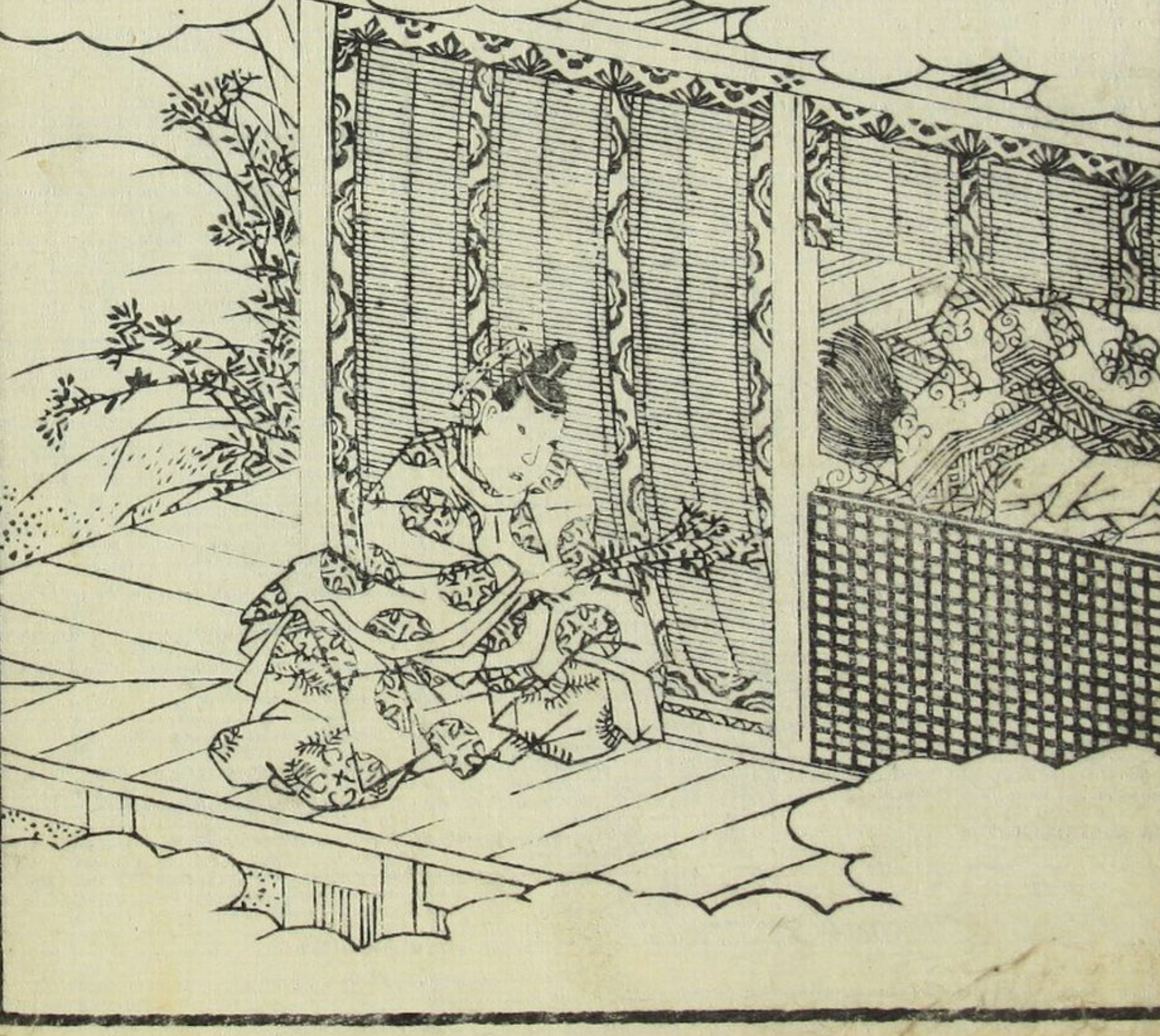


右棟衣小浜氏をむ
 けらるる為時の他とて
 ひけるる母のつらき
 ののちのちのちのちのち
 もとてまはりのの
 ぐりやまはりのの
 あとふしつり用
 由る

又中山内府の水鏡
 小浜氏武敏が深氏
 物徳つたりかて
 信々いささか凡夫
 の所好とくおがえ
 老日本紀をたう
 めとつて備家の
 日記ふしつるま
 あきつるふささり
 えたりとて時の人
 日本紀の局と号し
 信りたるま

又中山内府の水鏡
 小浜氏武敏が深氏
 物徳つたりかて
 信々いささか凡夫
 の所好とくおがえ
 老日本紀をたう
 めとつて備家の
 日記ふしつるま
 あきつるふささり
 えたりとて時の人
 日本紀の局と号し
 信りたるま

まき木柱
 しきんとう
 南うまね
 とき
 まつる
 油きの
 ちんら
 こまを
 こまを
 な



巴里のやまきり
 のこひひよよ
 源氏八和紙の奇筆
 あり言旨法下の臣
 小文が孝庸とのひ
 一人因州の牧ふつ
 へらるは人の後小有
 附孝庸言旨法下の
 世間のたよりふる
 書只何をうや一と仕
 るべきこととてのさ
 けは源氏物語りと
 こえたるひよふ哥
 学のや一ののふと
 とひなまは又源氏

物語とあてんさせ
 こまふ何もうも源
 氏ゆきまきぬるや
 とうけのりぬ源
 氏を百遍つぎふよ
 てるものハ再学の
 成就せるありとのさ
 まひよ孝庸
 洗ありと云く
 勅撰集の中ふあ
 ののりりの名の出
 ころ

千載集
 新勅撰集
 續古今集
 續後拾遺集



若菜上
 こま川
 なる
 ままの
 よらひひよ
 ひろ
 の
 神の
 つむ
 ばま



若菜上
 月
 か
 つ
 せ
 ま
 ん

新編古今集

右の撰集等と

拾遺抄小深氏の
がりの目録部立
あり明石の次小浦
傳の東宮の次小狭
席等の巻ありき
今の本よりいふ巻
ま

又十四帖のうち橋
の巻より後の序
揚のまゝいふるを
を宇治十帖といふ
こま光深氏の君
かくまさせしむ
のち小御子のかき

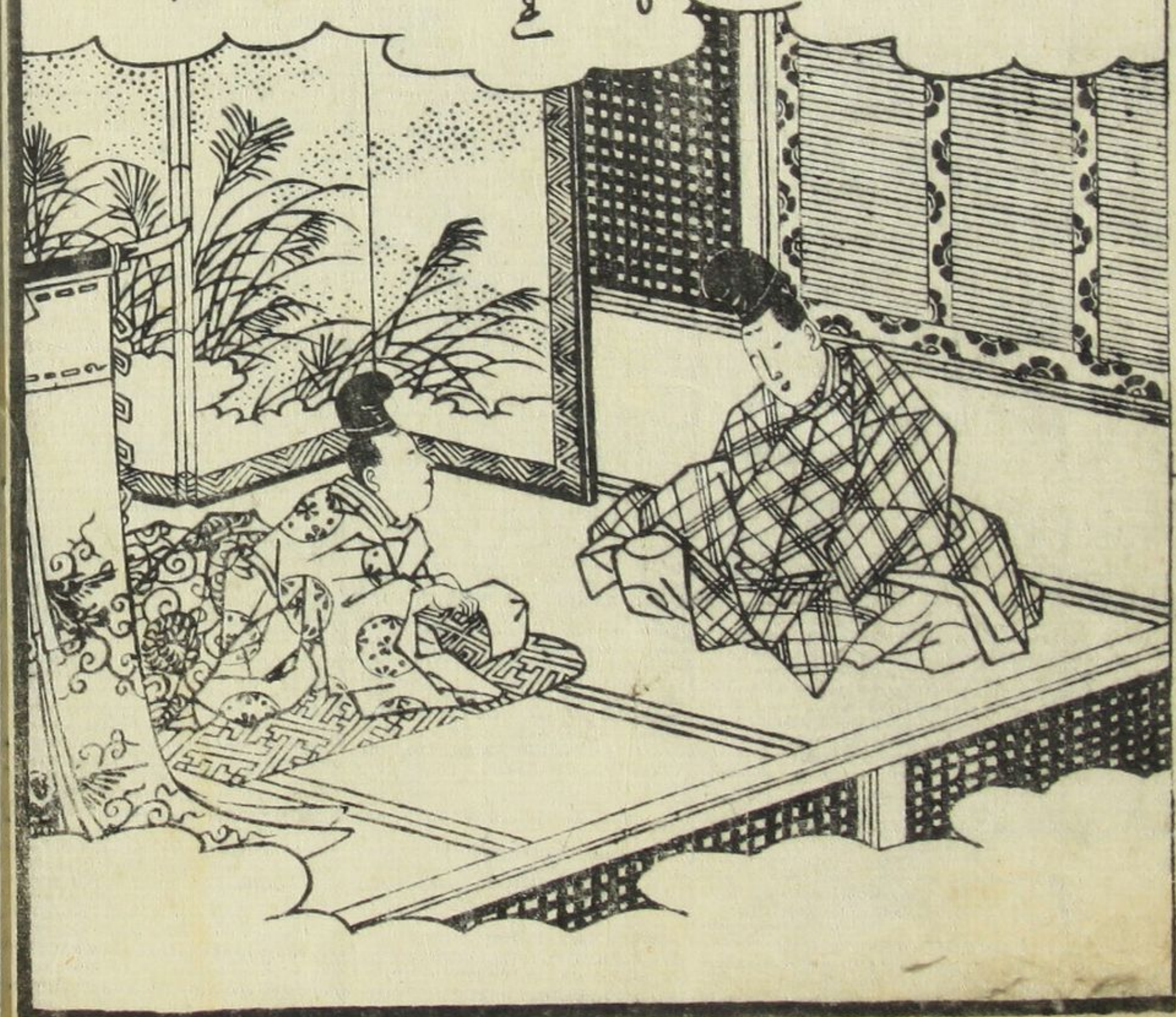
大納言治の八の宮
の姫君小うひひ
まひあをを書
けり

更科日記も深氏
ハ二十帖といひ
り六十帖といひ
今流布ある本を
隠浦傳校席等の
二三帖も落するの
れすて天教をあげ
て六十帖といひ
を天台の六十巻不
准らくるといひ
相傳の中小天台教
公の白くうけし



柏木

いふ
とく
けり
むまが
はま
のこ
らん



横笛

よ
ま
こ
ら
つ
せ



あるふい かく台宗
 小うまのりくろ人の
 ありさのいふの死
 源氏物語へおとく小
 好久のあつりるを
 らふうけどもまて
 好及のりふのふあ
 らむらうがの事
 世々の来ふありや
 けが上代の英風か
 とろくさ俗なるま
 ん子をちひふその
 あつるふいづき
 書人くしそてち
 づけむる人せなる
 けむせふあまの



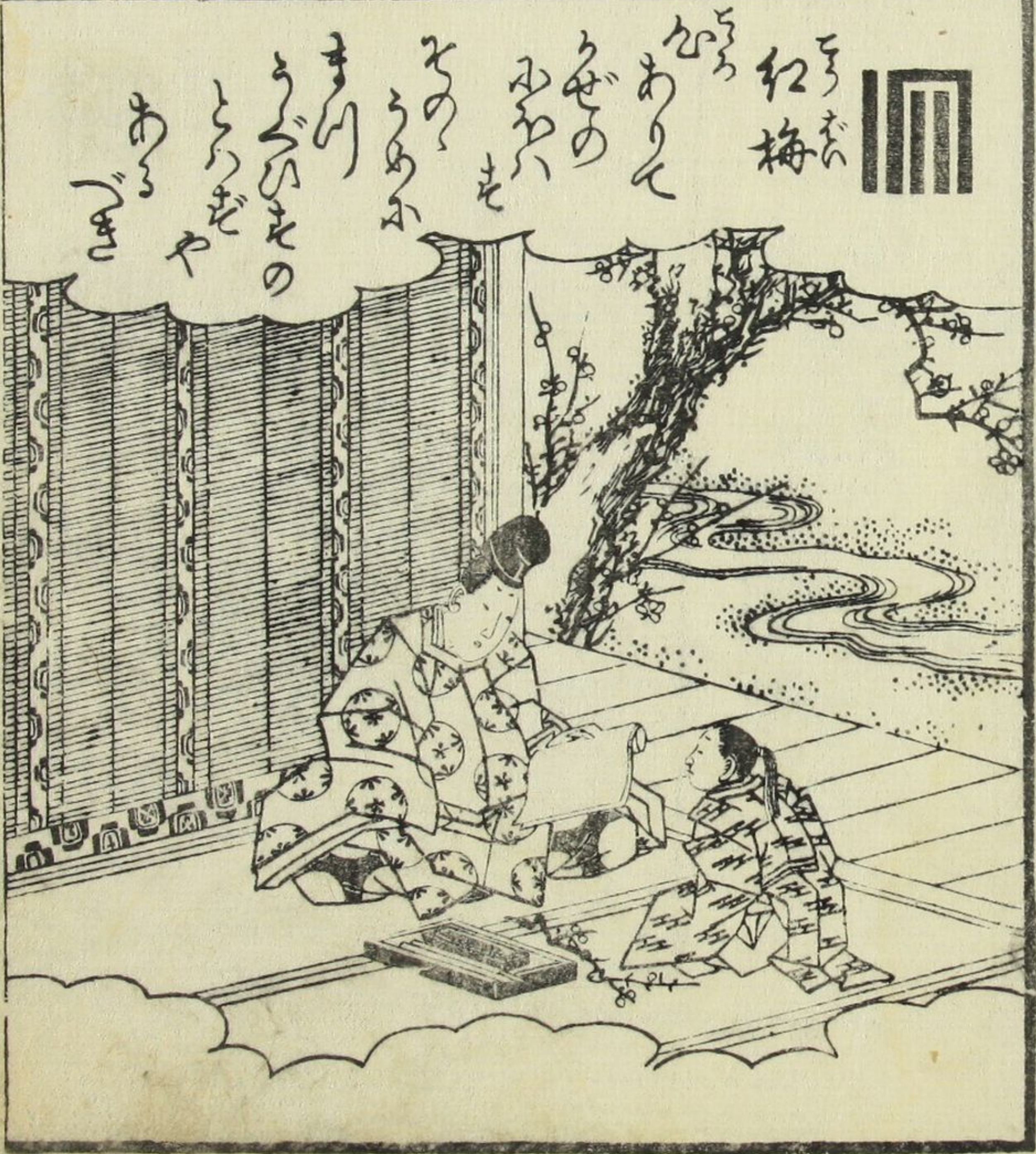
らびをくをうりこ
 るふかかむをまども
 ことばをくまて人
 いふかあまびその
 書ひまうくまび又
 ありてもつる人ま
 くみふまびあまひ
 とくくまあまひも
 そのせんあまひを
 ひそりのくまひを
 をくまひあまひ法
 をあつらまてま好
 及のたがまてま
 みるくまうちふ
 らあつの上の英
 風公のちひをく



事ハ知とせむま
 一の身まふ心を
 つけく書中のよ
 きつをのそるそ
 一のこけをうた
 ずんむく好久の
 るをわふふとま
 そんまく一益
 走くま一夫日本
 王道長久ある
 ハ礼楽文章をう
 一のむむく一信
 ちらむるをのてこ
 いのの礼楽文
 章をるるまの
 けののむの



のまのりかむあ
 不けののむのり
 かりと一ふをを
 けくむ上代の美
 風あり礼のた
 く一むるあふ
 の知一むるあ
 一の男女このふ上
 落ら一むるあ
 禮楽をのてあむ
 いや一むるあ
 めらひあり次子
 書中ふ人信をい
 つるむはむむ
 ありよく人信を
 まむむむ又倫の



化をうくしあふ事
 多し一もふのり
 ての國むさむらむ
 家もまことこの
 ぶさるふよりのけ
 物ごりのふもは海
 のゆふよせく人
 情をつくしあじ
 り且志せいのり
 ゆくさぬをよくあ
 せりの舟をまぐ免
 こころのまままで
 ままつくしの人の
 るれうしを結うま
 まらごごくうま
 りせりこそ又け物

竹川
 たけ川の
 りづら
 ひとふ
 ねさ
 こころ
 そこの
 あり
 あり



げりのふあの人
 情をえたるあ
 とも妙ありまて
 けいのげりの風
 化をのりか
 けり申もさ
 のまをく
 あるせり糸竹の
 あそびハ君子の
 ざりのくさんげん
 のあそびをさ
 さまが上菊の風
 俗さまをけん
 うふあさるもの
 はものごりの志
 んと人のこのめ

橋姫
 ひめの
 こころ
 さ
 ねさ
 さの
 志の
 そこの
 ねさ



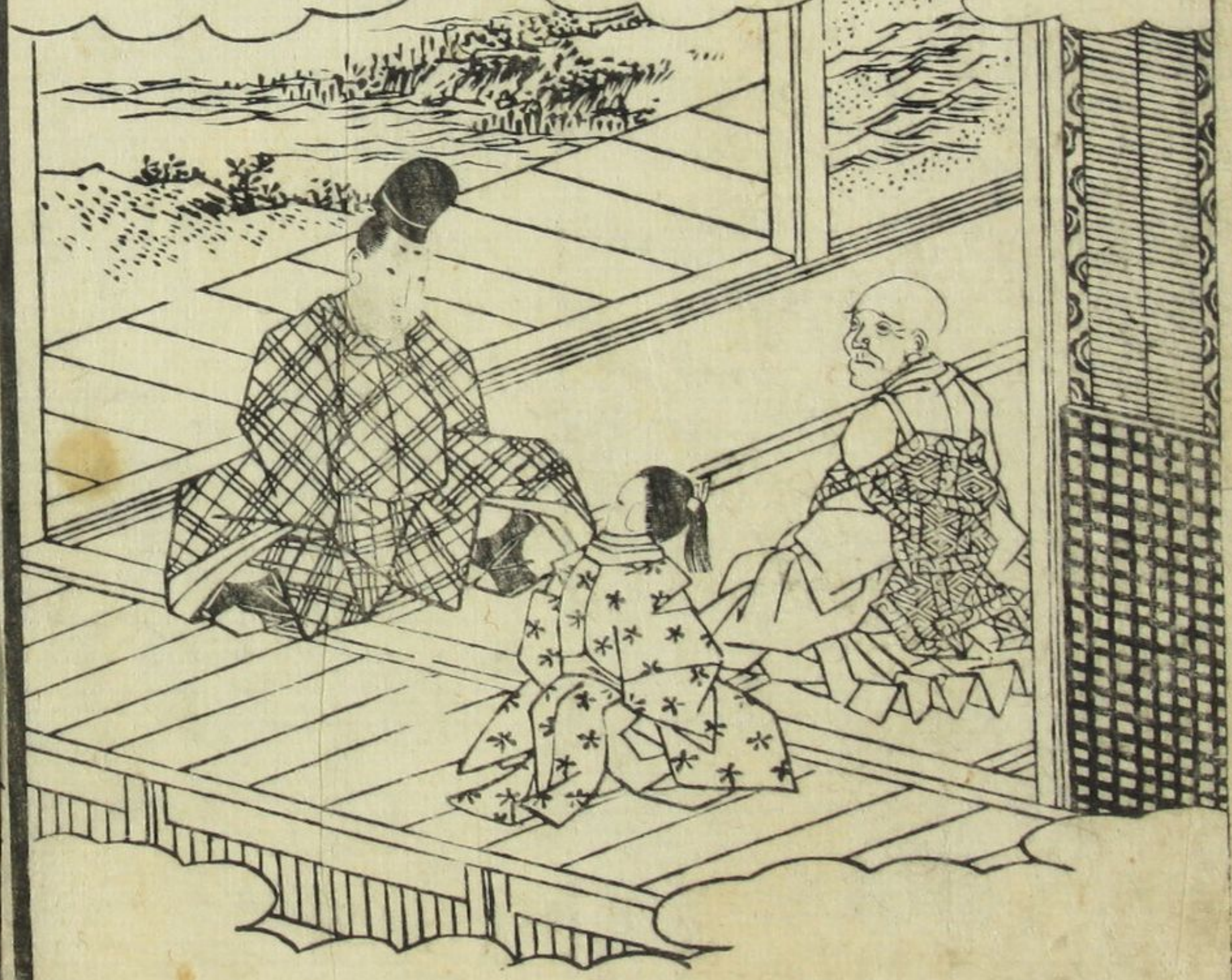
○仙源抄小源氏物語の形を以て其詞とて次成しとて跋にかるづらひの事を志す云々云々

明魏

山水のその
 流るるを
 みるるを
 みるるを
 みるるを



のりの
 なるるを
 なるるを
 なるるを
 なるるを



右 元板文化九年申年
 再板天保八年酉年

江戸芝神明前

和泉屋市兵衛板



雛本百人一首倭錦

女用文艶詞 寸小本

同 源氏物語絵巻

女年中祝賀嬉 寸小本

同 女今川繪畫

麩玉百人一首 寸小本

同 武者錦五冊入

女今川雲井の語 寸小本

常盤百人一首中本

女白鳥八状 寸小本

